川端康成集

33

日本文学全集

川端康成集

日本文学全集 33

筑摩書房

日本文学全集33　川端康成集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　川端康成

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

川端康成集　目次

雪国　五
千羽鶴　六八
山の音　一五三
伊豆の踊子　二一一
水晶幻想　二一八
二十歳　二四八
禽獣　二六一
再会　二七五
眠れる美女　二八八

末期の眼　四四
文学的自叙伝　四五三
純粋の声　四六三
年譜　四六八
人と文学　手塚富雄　四七七

口絵写真撮影　ケン・ダンカン

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

川端康成集

遊遊

泰

雪国

国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなつた。信号所に汽車が止まつた。

向側の座席から娘が立つて来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。娘は窓いつぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶやうに、

「駅長さあん、駅長さあん。」

明りをさげてゆつくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れてゐた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばつてゐるだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれてゐた。

「駅長さん、私です、御機嫌よろしうございます。」

「ああ、葉子さんぢやないか。お帰りかい。また寒くなつたよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいてをりますのですつてね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて参るだらうよ。若いのに可哀想だな。」

「ほんの子供ですから、駅長さんからよく教へてやつていただいて、よろしくお願ひいたしますわ。」

「よろしい。元気で働いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だつたよ。よく雪崩れてね、汽車が立往生するんで、村も焚出しがいそがしかつたよ。」

「駅長さんずゐぶん厚着に見えますわ。弟の手紙には、まだチョッキも着てゐないやうなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでゐるよ。それでごろごろあすこにぶつ倒れてるのさ、風邪をひいてね。」

駅長は官舎の方へ手の明りを振り向けた。

「弟もお酒をいただきますでせうか。」

「いや。」

「駅長さんもうお帰りですの？」

「私は怪我をして、医者に通つてるんだ。」

「まあ。いけませんわ。」

和服に外套の駅長は寒い立話をさつさと切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、

「それぢやまあ大事にいらつしやい。」

「駅長さん、弟は今出てをりませんの？」と、葉子は雪の上を目捜しして、

「駅長さん、弟をよく見てやつて、お願ひです。」

悲しいほど美しい声であつた。高い響きのまま夜の雪から木魂して来さうだつた。

汽車が動き出しても、彼女は窓から胸を入れなかつた。さうして線路の下を歩いてゐる駅長に追ひつくと、

「駅長さあん、今度の休みの日に家へお帰りつて、弟に言つてやつて下さあい。」

「はあい。」と、駅長が声を張りあげた。

葉子は窓をしめて、赤らんだ頬に両手をあてた。

ラッセルを三台備へて雪を待つ、国境の山であつた。トンネルの南北から、電力による雪崩報知線が通じた。除雪人夫延人員五千名に加へて消防組青年団の延人員二千名出動の手配がもう整つてゐた。

そのやうな、やがて雪に埋れる鉄道信号所に、葉子といふ娘の弟がこの冬から勤めてゐるのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。

しかし、ここで「娘」と言ふのは、島村にさう見えたからであつて、連れの男が彼女のなんであるか、無論島村の知るはずはなかつた。二人のしぐさは夫婦じみてゐたけれども、男は明らかに病人だつた。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。実際また自分より年上の男をいたはる女の幼い母ぶりは、遠目に夫婦とも思はれよう。

島村は彼女一人だけを切り離して、その姿の感じから、自分勝手に娘だらうときめてゐるだけのことだつた。でもそれには、彼がその娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果、彼自らの感傷が多分に加はつてのことかもしれない。

もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会ひに行く女をなまなましく覚えてゐる、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の触感で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうだと、不思議に思ひながら、鼻につけて匂ひを嗅いでみたりしてゐたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた。彼は驚いて声をあげさうになつた。しかしそれは彼が心を遠くへやつてゐたからのことで、気がついてみればなんでもない、向側の座席の女が写つたのだつた。外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかは明りがついてゐる。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スチイムの温みでガラスがすつかり水蒸気に濡れてゐるから、指で拭くまでその鏡はなかつたのだつた。

娘の片眼だけは反つて異様に美しかつたものの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさといふ風な旅愁顔を俄づくりして、掌でガラスをこすつた。

娘は胸をこころもち傾けて、前に横たはつた男を一心に見下してゐた。肩に力が入つてゐるところから、少しいかつい眼も瞬きさへしないほどの真剣さのしるしだと知れた。

男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげてゐた。三等車である。島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だつたから、横寝してゐる男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかつた。

娘は島村とちやうど斜めに向ひ合つてゐることになるので、ぢかにだつて見られるのだが、彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すやうな娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそつちを向いては悪いやうな気がしてゐたのだつた。

鏡の中の男の顔色は、ただもう娘の胸のあたりを見てゐるゆゑに安らかだといふ風に落ちついてゐた。弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂はせてゐた。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひつかけて口をぴつたり覆ひ、それからまた上になつた頬を包んで、一種の頬かむりのやうな工合だが、ゆるんで来たり、鼻にかぶさつて来たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやつてゐた。見てゐる島村がいら立つて来るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返してゐた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時々開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ気がついて直してやつてゐた。これらがまことに自然であつた。このやうにして距離といふものを忘れながら、二人は果しなく遠くへ行くものの姿のやうに思はれたほどだつた。それゆゑ島村は悲しみを見てゐるといふつらさはなくて、夢のからくりを眺めてゐるやうな思ひだつた。不思議な鏡のなかのことだつたからでもあらう。

鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのやうに動くのだつた。登場人物と背景とはなんのかかはりもないのだつた。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合ひながらこの世ならぬ象徴の世界を描いてゐた。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともつた時には、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へたほどだつた。

遙かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだつたから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものの形が消えてはゐなかつた。しかし色はもう失はれてしまつてゐて、どこまで行つても平凡な野山の姿が尚更平凡に見え、なにものも際立つて注意を惹きやうがないゆゑに、反つてなにかぼうつと大きい感情の流れであつた。無論それは娘の顔をそのなかに浮べてゐたからである。姿が写る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭のまはりを絶えず夕景色が動いてゐるので、娘の顔も透明のやうに感じられた。しかしほんたうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのやうに錯覚されて、見極める時がつかめないのだつた。

汽車のなかもさほど明るくはなし、ほんたうの鏡のやうに強くはなかつた。反射がなかつた。だから、島村は見入つてゐるうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまつて、

夕景色の流れのなかに娘が浮んでゐるやうに思はれて来た。

さういふ時彼女の顔のなかにともし火がともつたのだつた。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかつた。ともし火も映像を消しはしなかつた。さうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通るのだつた。しかし彼女の顔を光り輝かせるやうなことはしなかつた。冷たく遠い光であつた。小さい瞳のまはりをぼうつと明るくしながら、つまり娘の眼と火とが重なつた瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光虫であつた。

こんな風に見られてゐることを、葉子は気づくはずがなかつた。彼女はただ病人に心を奪はれてゐたが、たとへ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見えず、窓の外を眺める男など目に止まらなかつただらう。

島村が葉子を長い間盗見しながら彼女に悪いといふことを忘れてゐたのは、夕景色の鏡の非現実な力にとらへられてゐたからだつたらう。

だから彼女が駅長に呼びかけて、ここでもなにか真剣過ぎるものを見せた時にも、物語めいた興味が先きに立つたのかもしれない。

その信号所を通るころは、もう窓はただ闇であつた。向うに風景の流れが消えると鏡の魅力も失はれてしまつた。葉子の美しい顔はやはり写つてゐたけれども、その温かいしぐさにかかはらず、島村は彼女のうちになにか澄んだ冷たさを新しく見つけて、鏡の曇つて来るのを拭はうともしなかつた。

ところがそれから半時間ばかり後に、思ひがけなく葉子達も島村と同じ駅に下りたので、彼はまたなにか起るかと自分にかかはりがあるかのやうに振り返つたが、プラット・フォウムの寒さに触れると、急に汽車のなかの非礼が恥づかしくなつて、後も見ずに機関車の前を渡つた。

男が葉子の肩につかまつて線路へ下りようとした時に、こちらから駅員が手を上げて止めた。

やがて闇から現はれて来た長い貨物列車が二人の姿を隠した。

宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のやうにものものしい雪装束だつた。耳をつつみ、ゴムの長靴をはいてゐた。待合室の窓から線路の方を眺めて立つてゐる女も、青いマントを着て、その頭巾をかぶつてゐた。

島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて、そとのほんたうの寒さをまだ感じなかつたけれども、雪国の冬は初めてだから、土地の人のいでたちに先づおびやかされた。

「そんな恰好をするほど寒いのかね。」

「へい、もうすつかり冬支度です。雪の後でお天気になる前の晩は、特別冷えます。今夜はこれでもう氷点を下つてをりますでせうね。」

「これが氷点以下かね。」と、島村は軒端の可愛い氷柱を眺めながら、宿の番頭と自動車に乗つた。雪の色が家々の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでゐるやうだつた。
「なるほどなににさはつても冷たさがちがふよ。」
「去年は氷点下二十何度といふのが一番でした。」
「雪は？」
「さあ、普通七八尺ですけれど、多い時は一丈を二三尺超えてますでせうね。」
「これからだね。」
「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり降つたのが、だいぶ解けて来たところです。」
「解けることもあるのかね。」
「もういつ大雪になるか分りません。」
十二月の初めであつた。
島村はしつつこい風邪心地でつまつてゐた鼻が、頭のしんまですつといちどきに通つて、よごれものが洗ひ落されるやうに、水洟がしきりと落ちて来た。
「お師匠さんとこの娘はまだゐるかい。」
「へえ、をりますをります。駅にをりましたが、御覧になりませんでしたか、濃い青いマントを着て。」
「あれがさうだつたの？——後で呼べるだらう。」
「今夜ですか。」
「今夜だ。」
「今の終列車でお師匠さんの息子が帰るとか言つて、迎へに出てゐましたよ。」

夕景色の鏡のなかで葉子にいたはられてゐた病人は、島村が会ひに来た女の家の息子だつたのだ。
さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたやうに感じたけれども、このめぐりあはせを、彼はさほど不思議と思ふことはなかつた。不思議と思はぬ自分を不思議と思つたくらゐのものであつた。
指で覚えてゐる女と眼にともし火をつけてゐた女との間に、なにがあるのかなにが起るのか、島村はなぜかそれが心のどこかで見えるやうな気持もする。まだ夕景色の鏡から醒め切らぬせゐだらうか。あの夕景色の流れは、さては時の流れの象徴であつたかと、彼はふとそんなことを呟いた。
スキイの季節前の温泉宿は最も客の少い時で、島村が内湯から上つて来ると、もう全く寝静まつてゐた。古びた廊下は彼の踏む度にガラス戸を微かに鳴らした。その長いはづれの帳場の曲り角に、裾を冷え冷えと黒光りの板の上へ拡げて、女が高く立つてゐた。
たうとう芸者に出たのであらうかと、その裾を見てはつとしたけれども、こちらへ歩いて来るでもない、体のどこかを崩して迎へるしなを作るでもない、じつと動かぬその立ち姿から、彼は遠目にも真面目なものを受け取つて、急いで行つたが、女の傍に立つても黙つてゐた。女も濃い白粉の顔で微笑まうとすると、反つて泣き面になつたので、なにも言はずに二人は部屋の方へ歩き出した。

あんなことがあつたのに、手紙も出さず、会ひにも来ず、踊の型の本など送るといふ約束も果さず、女からすれば笑つて忘れられたとしか思へないだらうから、先づ島村の方から詫びかいひわけを言はねばならない順序だつたが、顔を見ないで歩いてゐるうちにも、彼女は彼を責めるどころか、体いつぱいになつかしさを感じてゐることが知れるので、彼は尚更、どんなことを言つたにしても、その言葉は自分の方が不真面目だといふ響きしか持たぬだらうと思つて、なにか彼女に気押される甘い喜びにつつまれてゐたが、階段の下まで来ると、

「こいつが一番よく君を覚えてゐたよ。」と、人差指だけ伸した左手の握り拳を、いきなり女の眼の前に突きつけた。

「さう？」と、女は彼の指を握るとそのまま離さないで手をひくやうに階段を上つて行つた。

火燵の前で手を離すと、彼女はさつと首まで赤くなつて、それをごまかすためにあはててまた彼の手を拾ひながら、

「これが覚えてゐてくれたの？」

「右ぢやない、こつちだよ。」と、女の掌の間から右手を抜いて火燵に入れると、改めて左の握拳を出した。彼女はすました顔で、

「ええ、分つてるわ。」

ふふと含み笑ひしながら、島村の掌を拡げて、その上に顔を押しあてた。

「これが覚えてゐてくれたの？」

「ほう冷たい。こんな冷たい髪の毛初めてだ。」

「東京はまだ雪が降らないの？」

「君はあの時、ああ言つてたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。さうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。」

あの時は——雪崩の危険期が過ぎて、新緑の登山季節に入つた頃だつた。

あけびの新芽も間もなく食膳に見られなくなる。

無為徒食の島村は自然と自身に対する真面目さも失ひがちなので、それを呼び戻すには山がいいと、よく一人で山歩きをするが、その夜も国境の山々から七日振りで温泉場へ下りて来ると、芸者を呼んでくれと言つた。ところが、その日は道路普請の落成祝ひで、村の繭倉兼芝居小屋を宴会場に使つたほどの賑かさだから、十二三人の芸者では手が足りなくて、たうてい貰へないだらうが、師匠の家の娘なら宴会を手伝ひに行つたにしろ、踊を二つ三つ見せただけで帰るから、もしかしたら来てくれるかも知れないとのことだつた。島村が聞き返すと、三味線と踊の師匠の家にゐる娘は芸者といふわけではないが、大きい宴会などには時たま頼まれて行くこともある、半玉がなく、立つて踊りたがらない年増が多いから、娘は重宝がられてゐる、宿屋の客の座敷へなど滅多に一人で出ないけれども、全くの素人とも言へない、ざつとこんな風な女中の説明だつた。

怪しい話だとたかをくくつてゐたが、一時間ほどして女が女中に連れられて来ると、島村はおやと居住ひを直した。直ぐ立ち上つて行かうとする女中の袖を女がとらへて、またそこに坐らせた。

女の印象は不思議なくらゐ清潔であつた。足指の裏の逞みまできれいであらうと思はれた。山々の初夏を見て来た自分の眼のせゐかと、島村は疑つたほどだつた。

着つけにどこか芸者風なところがあつたが、無論裾はひきずつてゐないし、やはらかい単衣をむしろきちんと着てゐる方であつた。帯だけは不似合に高価なものらしく、それが反つてなにかいたましく見えた。

山の話などはじめたのをしほに、女中が立つて行つたけれども、女はこの村から眺められる山々の名もろくに知らず、島村は酒を飲む気にもなれないでゐると、女はやはり生れはこの雪国、東京でお酌をしてゐるうちに受け出され、ゆくすゑ日本踊の師匠として身を立てさせてもらふつもりでゐたところ、一年半ばかりで旦那が死んだと、思ひの外素直に話した。しかしその人に死別れてから今日までのことが、恐らく彼女のほんたうの身の上話かもしれないが、それは急に打ち明けさうもなかつた。十九だと言つた。嘘でないなら、この十九が二十一二に見えることに島村ははじめてくつろぎを見つけ出して、歌舞伎の話などしかけると、女は彼よりも俳優の芸風や消息に精通してゐた。さういふ話相手に飢ゑてゐてか、夢中でしやべつてゐるうち、根が花柳界出の女らしいうちとけやうを示して来た。男の気心を一通り知つてゐるやうでもあつた。それにしても彼は頭から相手を素人ときめてゐるし、一週間ばかり人間とろくに口をきいたこともない後だから、人なつかしさが温かく溢れて、女に先づ友情のやうなものを感じた。山の感傷が女の上にまで尾をひいて来た。

女は翌日の午後、お湯道具を廊下の外に置いて、彼の部屋へ遊びに寄つた。

彼女が坐るか坐らないうちに、彼は突然芸者を世話してくれと言つた。

「世話するつて？」

「分つてるぢやないか。」

「いやあねえ。私そんなこと頼まれるとは夢にも思つて来ませんでしたわ。」と、女はぷいと窓へ立つて行つて国境の山々を眺めたが、そのうちに頬を染めて、

「ここにはそんな人ありませんわよ。」

「嘘をつけ。」

「ほんたうよ。」と、くるつと向き直つて、窓に腰をおろすと、

「強制することは絶対にありませんわ。みんな芸者さんの自由なんですわ。宿屋でもさういふお世話は一切しないの。ほんたうなのよ、これ。あなたが誰か呼んで直接話してごらんになるといいわ。」

「君から頼んでみてくれよ。」

「私がどうしてそんなことしなければならないの？」
「友だちだと思つてるんだ。友だちにしときたいから、君は口説かないんだよ。」
「それがお友達つてものなの？」と、女はつい誘はれて子供つぽく言つたが、後はまた吐き出すやうに、
「えらいと思ふわ。よくそんなことが私にお頼めになれますわ。」
「なんでもないことぢやないか。山で丈夫になつて来たんだよ。頭がさつぱりしないんだ。君とだつて、からつとした気持で話が出来やしない。」
女は瞼を落して黙つた。島村はかうなればもう男の厚かましさをさらけ出してゐるだけなのに、それを物分りよくうなづく習はしが女の身にしみてゐるのだらう。その伏目は濃い睫毛のせゐか、ほうつと温かく艶めくと島村が眺めてゐるうちに、女の顔はほんの少し左右に揺れて、また薄赤らんだ。
「お好きなのをお呼びなさい。」
「それを君に聞いてるんぢやないか。初めての土地だから、誰がきれいだか分らんさ。」
「きれいつて言つたつて。」
「若いのがいいね。若い方がなにかにつけてまちがひが少いだらう。うるさくしやべらんのがいい。ぼんやりしてゐて、よごれてないのが。しやべりたい時は君としやべるよ。」
「私はもう来ませんわ。」
「馬鹿言へ。」
「あら。来ないわよ。なにしに来るの？」
「君とさつぱりつきあひたいから、君を口説かないんぢやないか。」
「あきれるわ。」
「さういふことがもしあつたら、明日はもう君の顔を見るのもいやになるかもしれん。話に気乗りするなんてことがなくなるよ。山から里へ出て来て、せつかく人なつこいんだからね、君は口説かないんだ。だつて、僕は旅行者ぢやないか。」
「ええ。ほんたうね。」
「さうだよ。君にしたつて、君が厭だと思ふ女となら、後で会ふのも胸が悪いだらうが、自分が選んでやつた女ならまだましだらう。」
「知らないつ。」と、強く投げつけてそつぽを向いたものの、
「それはさうだけれど。」
「なにしたらおしまひさ。味気ないよ。長続きしないだらう。」
「さう。ほんたうにみんなさうだわ。私の生れは港なの。ここは温泉場でせう。」と、女は思ひがけなく素直な調子で、
「お客はたいてい旅の人なんですもの。私なんかまだ子供

ですけれど、いろんな人の話を聞いてみても、なんとなく好きで、その時は好きだとも言はなかつた人の方が、いつまでもなつかしいのね。忘れないのね。別れた後つてさうらしいわ。向うでも思ひ出して、手紙をくれたりするのは、たいていさういふんですわ。」

女は窓から立ち上ると、今度は窓の下の畳に柔かく坐つた。遠い日々を振り返るやうに見えながら、急に島村の身辺に坐つたといふ顔になつた。

女の声にあまり実感が溢れてゐるので、島村は苦もなく女を騙したかと、反つてうしろめたいほどだつた。

しかし彼は嘘を言つたわけではなかつた。女はとにかく素人である。彼の女ほしさは、この女にそれを求めるまでもなく、罪のない手軽さですむことだつた。彼女は清潔過ぎた。一目見た時から、これと彼女とは別にしてゐた。

それに彼は夏の避暑地を選び迷つてゐる時だつたので、この温泉村へ家族づれで来ようかと思つた。さうすれば女はさいはひ素人だから、細君にもいい遊び相手になつてもらへて、退屈まぎれに踊の一つも習へるだらう。本気にさう考へてゐた。女に友情のやうなものを感じたといつても、彼はその程度の浅瀬を渡つてゐたのだつた。

無論ここにも島村の夕景色の鏡はあつたであらう。今の身の上が曖昧な女の後腐れを嫌ふばかりでなく、夕暮の汽車の窓ガラスに写る女の顔のやうに非現実的な見方をしてゐたのかもしれない。

彼の西洋舞踊趣味にしてもさうだつた。島村は東京の下町育ちなので、子供の時から歌舞伎芝居になじんでゐたが、学生の頃は好みが踊や所作事に片寄つて来て、さうなると一通りのことを究めぬと気のすまないたちゆゑ、古い記録を漁つたり、家元を訪ね歩いたりして、やがては日本踊の新人とも知り合ひ、研究や批評めいた文章まで書くやうになつた。さうして日本踊の伝統の眠りにも新しい試みのひとりよがりにも、当然なまなましい不満を覚えて、もうこの上は自分が実際運動のなかへ身を投じて行くほかないといふ気持に狩り立てられ、日本踊の若手からも誘ひかけられた時に、彼はふいと西洋舞踊に鞍替へしてしまつた。日本踊は全く見ぬやうになつた。その代りに西洋舞踊の書物と写真を集め、ポスタアやプログラムの類まで苦労して外国から手に入れた。異国と未知とへの好奇心ばかりでは決してなかつた。ここに新しく見つけた喜びは、目のあたり西洋人の踊を見ることが出来ないといふところにあつた。その証拠に島村は日本人の西洋舞踊は見向きもしないのだつた。西洋の印刷物を頼りに西洋舞踊について書くほど安楽なことはなかつた。見ない舞踊などこの世ならぬ話である。これほど机上の空論はなく、天国の詩である。研究とは名づけても勝手気儘な想像で、舞踊家の生きた肉体が踊る芸術を鑑賞するのではなく、西洋の言葉や写真から浮ぶ彼自身の空想が踊る幻影を鑑賞してゐるのだつた。見ぬ恋にあこがれるやうなものである。しかも、時々西洋舞踊の

紹介など書くので文筆家の端くれに数へられ、それを自ら冷笑しながら職業のない彼の心休めとなることもあるのだつた。

さういふ彼の日本踊などの話が、女を彼に親しませる助けとなつたのは、その知識が久し振りで現実に役立つたともいふべきありさまだつたけれども、やはり島村は知らず識らずのうちに、女を西洋舞踊扱ひにしてゐたのかもしれない。

だから自分の淡い旅愁じみた言葉が、女の生活の急所に触れたらしいのを見ると、女を騙したかとうしろめたいぐらゐだつたが、

「さうしておけば、今度僕が家族を連れて来たつて、君と気持よく遊べるさ。」

「ええ、そのことはもうよく分りましたわ。」と、女は声を沈めて微笑むと、少し芸者風にはしやいで、

「私もそんなのが大好き、あつさりしたのが長続きするわ。」

「だから呼んでくれよ。」

「今？」

「うん。」

「驚きますわ。こんな真昼間になんにもおつしやれないでせう？」

「屑が残るといやだよ。」

「あんたそんなこと言ふの、この土地を荒稼ぎの温泉場と考へちがひしていらつしやるのよ。村の様子を見ただけでも分らないかしら。」と、女はいかにも心外らしく真剣な口振りで、ここにはさういふ女のゐないことを繰り返して力説した。島村が疑ふと、女はむきになつて、しかし一歩譲つて、それはどうしようと芸者の勝手だけれども、ただ、うちへことわらずに泊れば芸者の責任で、どうならうとかまつてはくれないが、うちへことわつとけば抱主の責任で、どこまでも後を見てくれる、それだけのちがひだと言ふ。

「責任てなんだ。」

「子供が出来たり、体が悪くなつたりすることですわ。」

島村は自分の頓馬な質問に苦笑ひしながら、そのやうにのんきな話も、この山の村にはあるかも知れないと思つた。

無為徒食の彼は自然と保護色を求める心があつてか、旅先の土地の人気には本能的に敏感だが、山から下りて来ると直ぐこの里のいかにもつましい眺めのうちに、のどかなものを受け取つて、宿で聞いてみると、果してこの雪国でも最も暮しの楽な村の一つだとのことだつた。つい近年鉄道の通じるまでは、主に農家の人々の湯治場だつたといふ。芸者のゐる家は料理屋とかしるこ屋とか色褪せた暖簾をかけてゐるが、古風な障子のすすけたのを見ると、これで客があるのやら、そして日用雑貨の店や駄菓子屋にも、抱へをたつた一人置いてゐるのがあつて、その主人達は店のほかに田畑で働くらしかつた。師匠の家の娘だからではあらうが、鑑札のない娘がたまに宴会などの手伝ひに出ても、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo